

2024年10月17日

明治安田 子育てに関するアンケート調査を実施
男性の育休取得進展も企業規模別では格差と課題
育休明けの現実—4割の男性が感じる職場復帰時の気まずさ
もっと人手が足りていれば…

明治安田生命保険相互会社（執行役社長 永島 英器）は、0歳から6歳までの子どもがいる既婚男女に「子育てに関するアンケート調査」を実施しましたのでご報告します。

1. 男性の育休について

（1）男性育休の進捗状況

男性の育休取得が進展も企業規模別では格差と課題

- ・ 男性の育休取得が促進されるなか、育休を取得した男性は33.4%、取得日数は平均42日と、前年よりさらに進展し、昨年の過去最高値を更新！
- ・ しかし、男性の育休取得状況を男性回答者の企業規模別でみると、大企業^{（※1）}に勤める男性が51.6%に対し、中小企業^{（※2）}に勤める男性は26.2%と、取得率には格差が
- ・ 理想どおり育休を取得できなかった理由は「金銭面で取得しにくかった」（29.7%）が最も多く、次いで「長期職場を離れ、仕事のスキル・経験に支障がでるため」（17.1%）
「長期職場を離れ、職場に戻る際の周囲の雰囲気不安がある」（15.0%）の回答も目立った
- ・ また、中小企業に勤める男性の約6割が会社から育休取得について説明がなかったと回答
- ・ 日本全体の企業数では中小企業が99.7%を占めており、政府が掲げる2025年に男性育休取得50%を達成するためにも、大企業でのさらなる育休取得促進に向けた取組みに加え、中小企業での職場理解を深めていくことも重要となるのでは？

（※1, 2）大企業と中小企業は従業員数で区分（大企業：1,001人以上 中小企業：1,000人以下）

（2）男性育休“取得後の職場の雰囲気”

育休明けの現実—4割の男性が感じている職場復帰時の気まずさ
もっと人手が足りていれば…

- ・ 育休を取得した男性で、取得後に職場で気まずいと感じた男性は41.5%で、取得率・日数とも進展をみせるが、男性が気兼ねなく育休を取得できる環境とは言い難い
- ・ 育休取得後、気まずさを感じないためにあったら良いと思う制度について聞くと、最も多い回答は「人員の補充」（24.7%）
- ・ また、育休を取得していない男性も、あったら良いと思う制度で「人員の補充」（25.5%）を最も望んでおり、男性が育休を取得しやすくなる環境のためには、“人手不足”の解消がキーポイント

明治安田総合研究所 フェロー チーフエコノミスト 小玉 祐一が
 男性の育休について分析！…P. 10

【ご照会先】
 広報部 広報グループ TEL 03-3283-8054

明治安田生命保険相互会社 〒100-0005 東京都千代田区丸の内2-1-1

ひとに健康を、まちに元気を。

みんなの
健活
プロジェクト



2. 子育て世帯のお金について

子育て費用は前年から月額1,000円以上アップし、過去最高値！

9割の人が物価高騰により子どもに与える影響を懸念

- ・ 子育てにかかる費用は、月額平均「41,320円」で、前年から1,187円アップし、過去最高値に！
- ・ 子育て費用を負担に感じている人は約9割（88.7％）で、項目では「食費」（45.0％）「保育園・幼稚園代」（40.2％）「習い事やお稽古事」（36.8％）の順に負担を感じている
- ・ 物価高騰が子育て費用に打撃を与えるなか、約9割（88.5％）の人が子どもに与える影響について懸念しており、6割の人が「教育格差の広がり」や、「将来の進学への影響」「子どもの習い事・体験機会の減少」など、子どもの教育に懸念を抱いている
- ・ また、半数近くの人（44.7％）が子育て費用を節約していると回答
- ・ 節約している項目では、「衣類費」（48.6％）が最も多く、次いで「食費」（46.7％）、「レジャー・旅行費」（37.2％）の結果となった

明治安田総合研究所 フェロー チーフエコノミスト 小玉 祐一が
子育てにかかる費用 物価高の影響について分析！…P. 13

3. 子どもを望む気持ちについて

理想の子どもの人数は「2.51人」 6割が理想に届かず

- ・ 子どもが1人以上いる男女に、理想の子どもの人数を聞くと、「2.51人」で、理想の子どもの人数よりも、実際の子どもの人数が少ない人は約6割（62.6％）
- ・ 理想より実際の子どもの人数が少なく、出産に関して消極的な人は67.5％で、最も大きな理由は「将来の収入面に不安があるから」
- ・ その他の理由では、「年齢的に不安があるから」「教育費がかかるから」という順だった
- ・ また、「年齢的な不安」を理由にあげた人の平均年齢は43.6歳で、晩婚化も影響しているのかもしれない
- ・ 一方、子どもを「さらに欲しい」と回答した人（21.4％）に、理由を聞くと、「自身・配偶者の収入アップ」（57.0％）が最も多く、次いで「子育て世帯の税制優遇」（35.3％）「幼保無償化」（32.3％）の順だった
- ・ 出生率が1.20人に対し、子育て世帯ではそれ以上の子どもの人数を理想としているが、子どもを望む気持ちには、生活の基盤となる収入への不安や中長期的な子どもを養育するための支出に対する不安を解消することが不可欠で、少子化解消に向けて、さらなる賃上げや、税制改革などが必要なのかもしれない

明治安田総合研究所 エコノミスト 木村 彩月が
子どもを望む気持ち 少子化への影響について分析！…P. 17

4. イクメンの浸透について

「イクメン」認知度9割も使用率1割未満 男性の育児は「当たり前」に変貌

- ・「イクメン」という言葉の使用について聞いたところ、認知度は9割以上だが使用率は1割未満で、ほとんど使われていない状況であることがわかった
- ・なぜ使用しないのか理由を聞くと、7割の人が「男性の育児は当たり前で言葉に違和感がある」や「育児をしている男性を特別視したくない」といった、男性の育児は当たり前で、使用するまでもないと思う人が多数
- ・2010年に厚生労働省で、男性の育休を推進する「イクメンプロジェクト」が発足し、当時流行語大賞にも選ばれた“イクメン”という言葉は、世の中にすっかり浸透し、「男性の育児は当たり前」という意識改革へつながる功績を残した

5. 男性の子育てへの意識と子育て分担割合

男性の育児は当たり前だが、育児の実態は収入差や就業環境で女性に偏る

- ・共働きの男女で子育て分担割合をみると、男3（29.8%）：女7（70.2%）の状況
- ・男性育休の取得率は、調査開始の2018年から倍近く上昇したのに対し、（2018年：16.8%→2024年：33.4%）子育ての分担割合は微増（2018年：24.1%→2024年：29.8%）
- ・妻の方が分担割合が高い男性にその理由を聞くと、「自身の方が収入が高く仕事をセーブできない」（39.1%）や「育児を理由に自分の仕事をセーブしづらい雰囲気があるため」（22.8%）といった、就業環境を理由とした回答が6割（61.9%）を超えた。
- ・男性が育児をすることは当たり前となったようだが、まだまだ子育ての比重は女性に偏る
- ・日本は男女の賃金格差が大きいとされており、縮小に向けて企業による取組みなどが求められているが、男女平等な子育てを進めるためにも、女性が男性並みの収入を得ることや、男女ともに柔軟に働ける職場環境づくりを進める必要があるのかもしれない

6. 子育てをしたい都道府県

トップは東京都！理由は「教育環境が充実しているから」

- ・トップは東京都で、理由は「教育環境が充実しているから」や、「子育て支援制度が充実している」を選んだ人が多数。2位は神奈川県、3位は大阪府で「親や親族が近くにいるから」という理由が最も多かった。
- ・また、現在の居住地で子育てをしたいという人は7割以上（74.5%）で、子育てをするには慣れ親しんだ環境が良いと思う人が多いのかもしれない
- ・居住地以外で子育てをしたい都道府県のトップも東京都で、理由は「教育環境が充実しているから」2位は福岡県で、最も多い理由は「教育環境が充実しているから」、3位は北海道で最も多い理由は「自然環境が豊か」の順だった
- ・慣れ親しんだ土地以外での子育て環境では、「教育環境の充実」や「自然環境」に魅力を感じるようだ

【子育てをしたい都道府県 トップ3】

順位	都道府県	最も多い理由
1位	東京都（15.7%）	教育環境が充実しているから
2位	神奈川県（7.9%）	親や親族が近くにいるから
3位	大阪府（7.8%）	親や親族が近くにいるから

【居住地以外で子育てをしたい都道府県 トップ3】

順位	都道府県	最も多い理由
1位	東京都（20.3%）	教育環境が充実しているから
2位	福岡県（9.3%）	教育環境が充実しているから
3位	北海道（8.2%）	自然環境が豊か

7. 0～6歳の子どもがいる理想のパパ・ママ有名人 ランキング

理想のパパは杉浦太陽さん 理想のママは北川景子さん

【理想のパパトップ3】※敬称略

順位	理想のパパ	代表的な理由
1位	杉浦太陽 （25.9%）	子育てに協力的なイメージ 家族の仲が良い
2位	DAIGO （11.4%）	やさしくて人柄がよい 奥さんのことを大事にしている
3位	賀来賢人 （6.6%）	おしゃれでかっこいいから 子育てを楽しんでいそう

【理想のママトップ3】※敬称略

順位	理想のママ	代表的な理由
1位	北川景子 （20.6%）	いつも綺麗でかっこいい 子育てと仕事を両立していそう
2位	辻希美 （17.4%）	育児を楽しくがんばっている 夫婦で協力しあってそう
3位	上戸彩 （8.5%）	子ども好きで可愛がっている 出産しても可愛いから

＜対象者の属性＞

1. 調査対象

0歳から6歳までの子どもがいる既婚男女

2. 調査エリア

全国

3. 調査期間

2024年9月4日（水）～9月5日（木）

4. 調査方法

インターネット調査

5. 有効回答者数

1,100人

6. 回答者の内訳

（単位：人）

	夫婦共働き	妻（自身） が専業主婦	計
0歳から6歳までの子どもがいる既婚男性	385	165	550
0歳から6歳までの子どもがいる既婚女性	385	165	550
計	770	330	1,100

【目 次】

<u>1. 男性の育休について</u>	
(1) 男性育休の進捗状況	・・・ 7～8 ページ
(2) 男性育休 “取得後の職場の雰囲気”	・・・ 9～10 ページ
<u>2. 子育て世帯のお金について</u>	・・・ 11～13 ページ
<u>3. 子どもを望む気持ちについて</u>	・・・ 14～17 ページ
<u>4. イクメンの浸透について</u>	・・・ 18 ページ
<u>5. 男性の子育てへの意識と子育て分担割合</u>	・・・ 19～20 ページ
<u>6. 子育てをしたい都道府県</u>	・・・ 21 ページ
<u>7. 0～6歳の子どもがいる理想のパパ・ママ有名人 ランキング</u>	・・・ 22 ページ

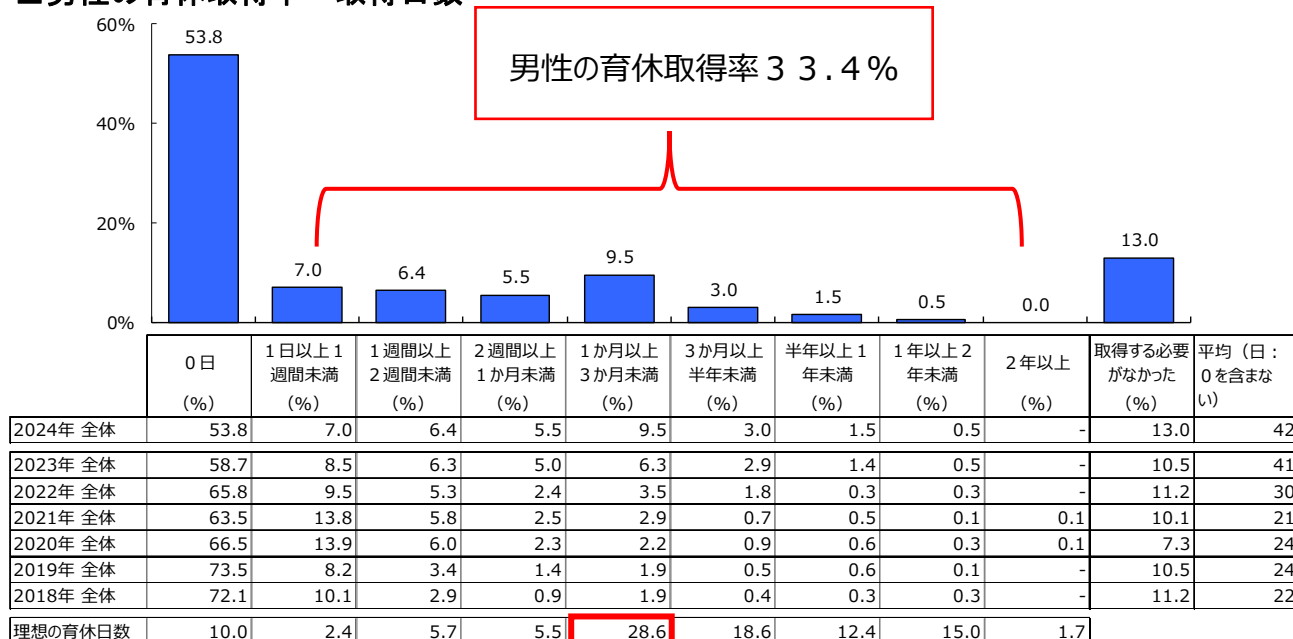
1. 男性の育休について

(1) 男性育休の進捗状況

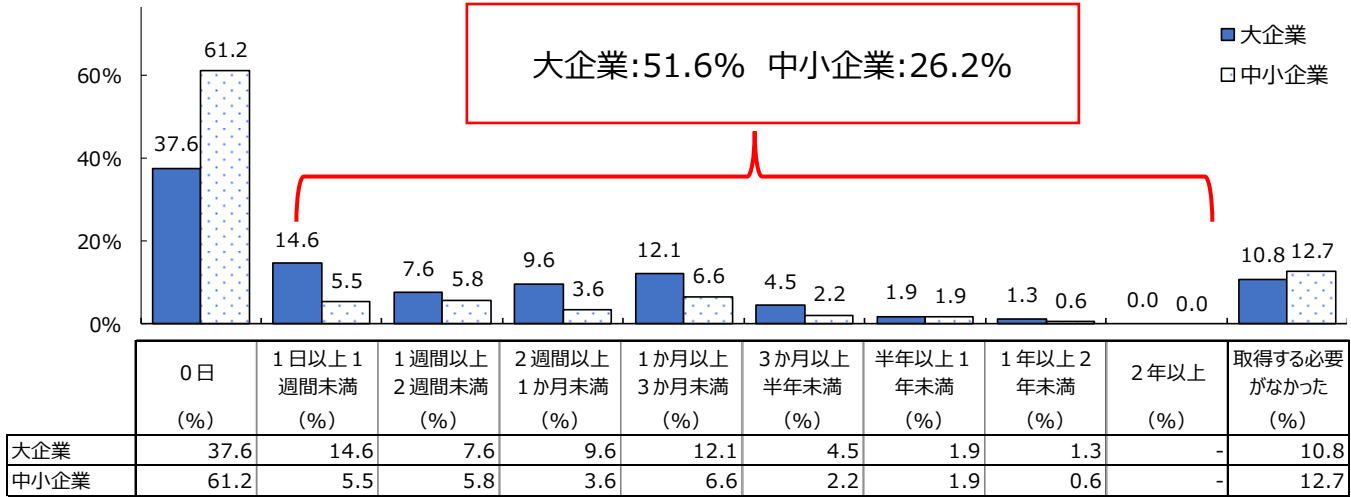
男性の育休取得が進展も企業規模別では格差と課題

- 男性の育休取得は着実に広がりを見せており、取得率は前年から2.6p t 上昇し、33.4%となり、取得日数も前年より1日伸び平均42日と、取得率・日数とも、前年の過去最高値を更新する結果となりました。
 - しかし、男性の育休取得状況を男性回答者の企業規模別でみると、大企業^(※1)に勤める男性の取得率は51.6%であるのに対し、中小企業^(※2)に勤める男性は26.2%にとどまり、大きな差が生じています。
 - 育休を取得した人も、理想どおりの日数がとれた人は12.3%と僅かでした。思うように育休を取得できなかった理由をみると（未取得者も含む）、「金銭面で取得しにくかった」（29.7%）が最も多く、次いで「長期職場を離れ、仕事のスキル・経験に支障がでるため」（17.1%）「長期職場を離れ、職場に戻る際の周囲の雰囲気不安がある」（15.0%）の回答も目立ちました。
 - なお、令和3年に育休制度が改正された際、妊娠・出産の申出をした労働者に対する個別の周知・意向確認の措置が義務付けされましたが、中小企業に勤める男性の約6割が会社から育休取得について説明がないこともわかりました。（中小企業：59.1% 大企業：45.2%）
 - 日本全体の企業数では中小企業が99.7%を占めており、政府が掲げる2025年に男性育休取得50%を達成するためにも、大企業でのさらなる育休取得促進に向けた取組みに加え、中小企業での職場理解を深めていくことも重要となるのではないのでしょうか。
- (※1, 2) 大企業と中小企業は従業員数で区分（大企業：1,001人以上 中小企業：1,000人以下）

■男性の育休取得率・取得日数

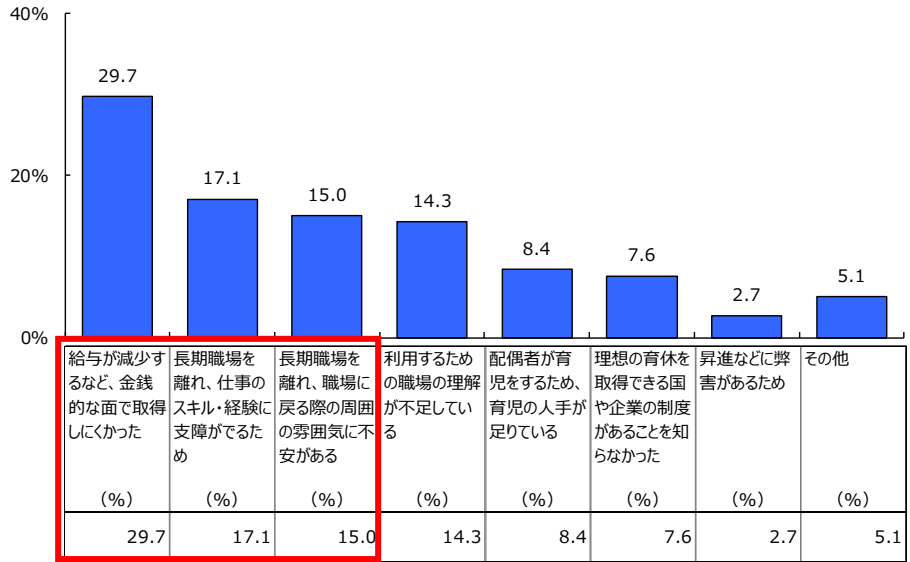


■男性の育休取得率（男性回答者の企業規模別）

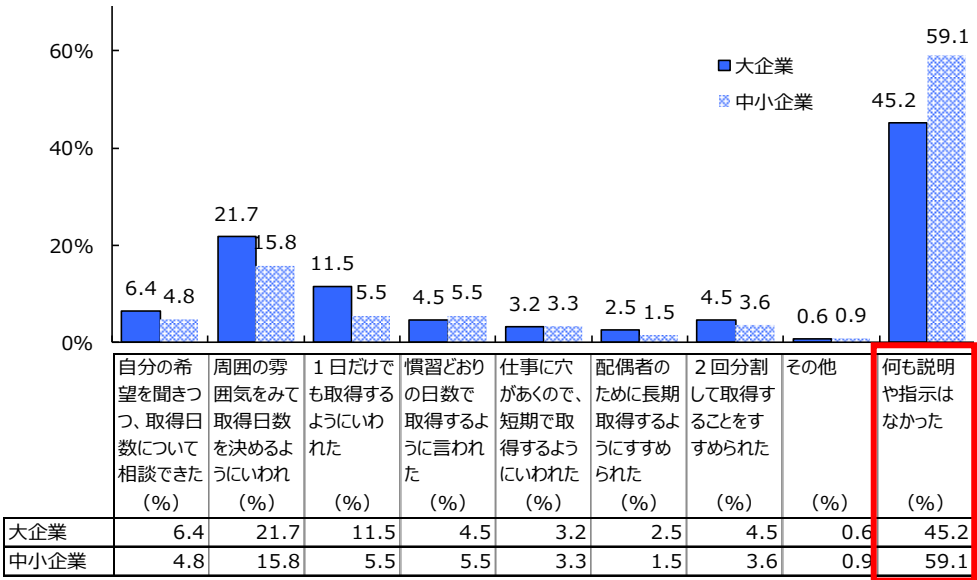


■理想の日数育休を取得できなかった理由

（※理想どおり育休を取得できなかった男性の回答：未取得者含む）



■育休取得について会社からの説明状況（※男性回答者の企業規模別）



(2) 男性育休“取得後の職場の雰囲気”

育休明けの現実—4割の男性が感じている職場復帰時の気まずさ もっと人手が足りていれば…

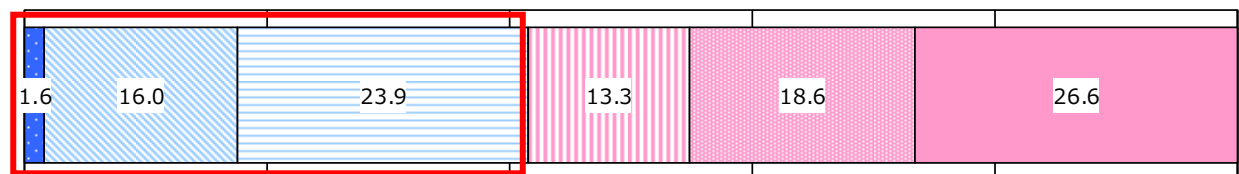
○育休取得のしづらさについて、「職場の雰囲気」が上位に挙がりましたが、育休を取得した男性に、「取得後職場で気まずいと感じたか」聞くと、「気まずく感じた」と回答した男性は41.5%で、男性が気兼ねなく育休を取得できる環境とはいづらい状況です。

○では、どうすれば気兼ねなく育休を取得できるようになるのか、育休取得後、職場で気まずさを感じた男性に、あれば良いと思う会社の制度について聞くと、最も多い回答は「人員の補充」（24.7%）で、次いで、「同僚への応援手当」（23.4%）「育休取得の義務化」（23.4%）の順となりました。

○また、育休未取得の男性にも同様に、あったら良いと思う制度について聞くと、「人員の補充」（25.5%）を最も望んでおり、男性が育休を取得しやすくなるためには、「人手不足」の解消がキーポイントとなりそうです。

■育休取得後に気まずさを感じたか（※育休を取得した男性の回答）

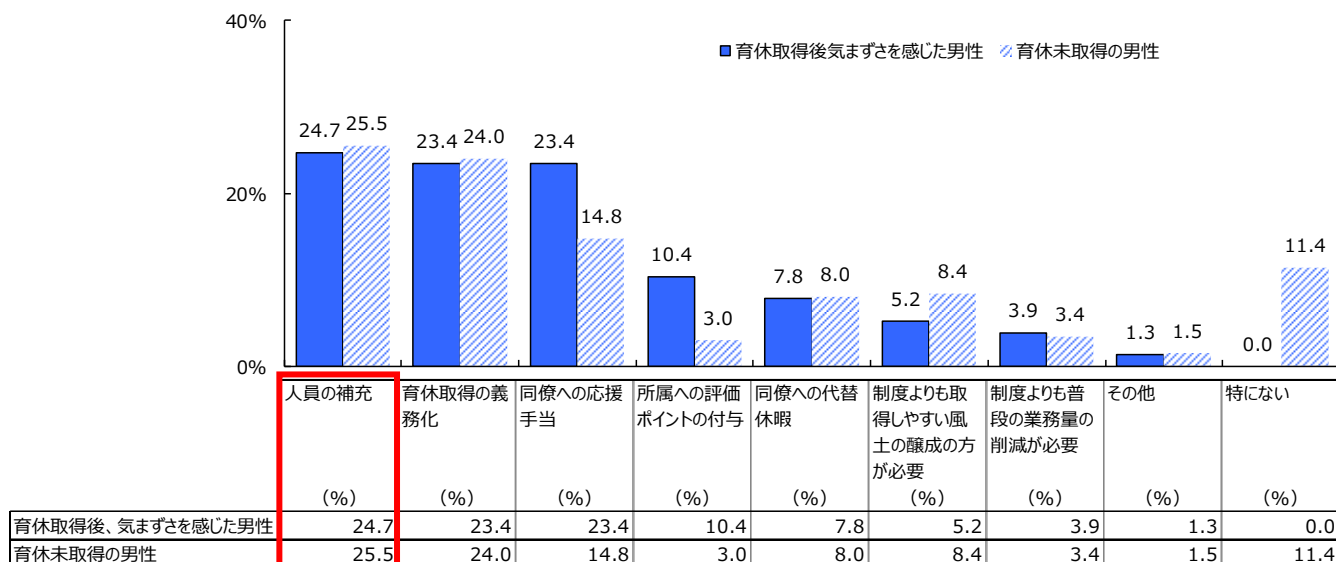
育休取得後職場で気まずいと感じた男性は約4割



■とても気まずく感じた □気まずく感じた □少し気まずく感じた □どちらかという気まずく感じなかった □気まずく感じなかった □全く気まずく感じなかった

■育休取得する際にあったら良いと思う制度

（※育休取得後気まずさを感じた男性、育休未取得の男性の回答）



～フェロー チーフエコノミスト 小玉 祐一はこう見る！～

■明治安田総合研究所 フェロー チーフエコノミスト 小玉 祐一



男性の育休取得率、取得日数とも前年の過去最高値を更新する結果となったのはいいニュースです。ただ、取得日数（４２日）は昨年度から１日上乗せしただけにとどまりました。２００１年（２１日）との比較では約２倍に増えているものの、ここへきて頭打ち感も漂っています。

男性に理想の育児休暇日数を聞くと、「１ヵ月以上３ヵ月未満」が２８．６％と最も多く、理想とする水準に近づいているのが一因かもしれません。ただ、大企業の取得率が半分以上に達しているのに対し、中小企業では４人に１人にとどまっています。また、いまだに半分以上の５３．８％もの男性が取得日数を０日と答えていることを考えれば、男性育休の普及はまだまだ道半ばといえます。

育休を取れなかった理由としては、企業規模別を問わず、「金銭面で取得しにくかった」が最も多くなっています。これについては、育休手当からは社会保険料を支払う必要がないため、多くの人が思っているほど手取り収入が減らない可能性があることなどを周知する必要があると思います。

次に多い理由が「職場の理解不足」であり、こちらの方が大きな問題かもしれません。アンケートでは、育休取得後に職場での気まずさを感じた男性が４１．２％に上っています。また、育休を取得していない男性に、取得しやすくなるためにあったらいいと思う制度を聞くと、人員の補充が２５．５％でトップになっています。元々従業員の数が少ない中小企業では、一人抜けることの会社の業務への影響が大企業とは比較にならないほど大きく、かつ、人手不足下で人員の補充も難しいことが普及を妨げている一因とみられます。単なる「職場の理解」だけでは解決できない難しい問題ですが、官民一体となった、職場の風土や働き方改革への取り組み強化により、取得率を少しでも上げていく工夫が必要です。

2. 子育て世帯のお金について

子育て費用は前年から月額1,000円以上アップ
9割の人が物価高により子どもに与える影響を懸念

○子育てにかかる費用について調査したところ、月額平均は「41,320円」となり、前年の「40,133円」から「1,187円」増加し、物価高の影響を反映しています。なお、この金額は2018年の調査開始以来、過去最高値となりました。

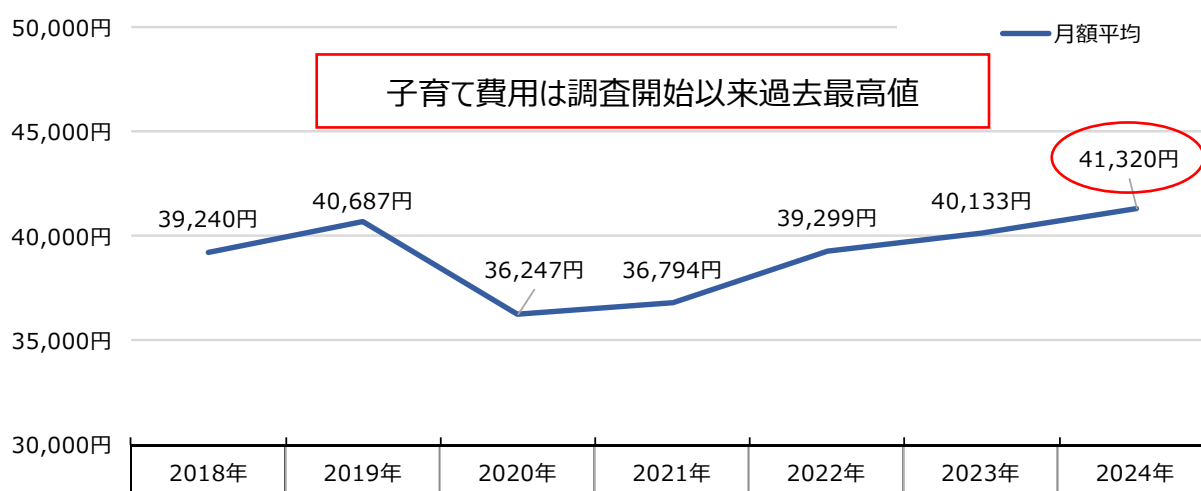
○子育てで負担に感じる費用を聞いたところ、トップは「食費」（45.0%）、次いで「保育園代・幼稚園代」（40.2%）、「習い事やお稽古事の費用」（36.8%）となりました。

○また、約9割の人（88.5%）が、物価高が子どもに影響を与えることについて懸念していることがわかりました。なかでも、「教育格差の広がり」（22.7%）や、「将来の進学への影響」（19.0%）「子どもの習い事・体験機会の減少」（17.9%）など、約6割の人が子どもの教育に懸念を抱いています。

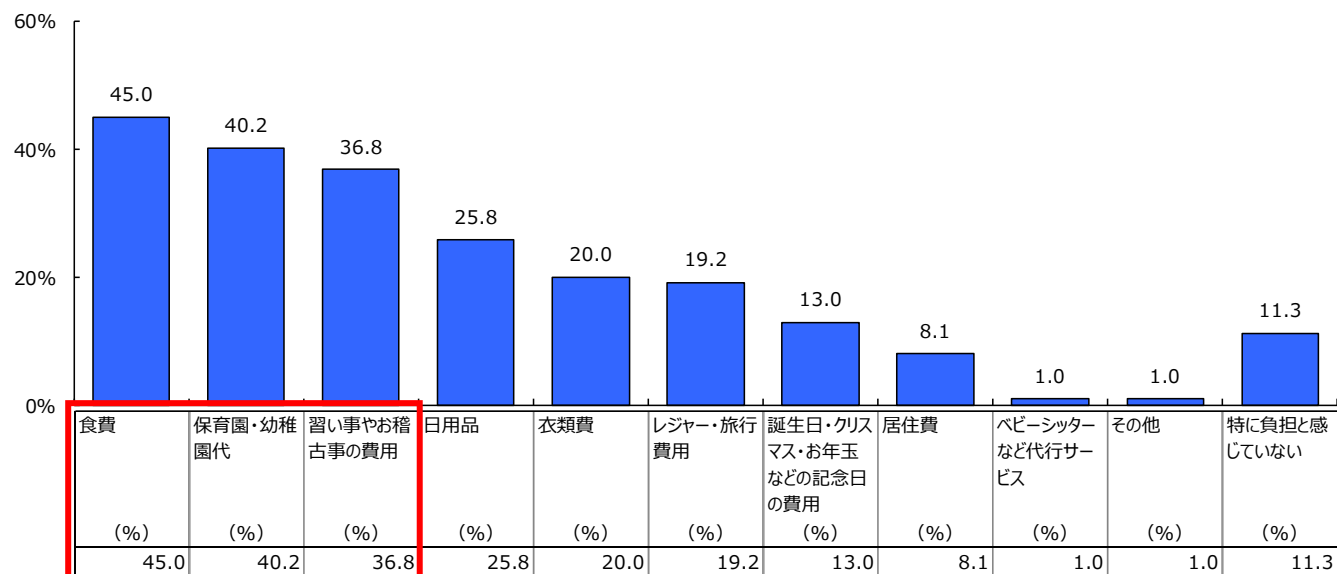
○次に、子育てにかかる費用の節約状況について聞くと、半数近くの人（44.7%）が「子育て費用を節約している」と回答しました。

○節約している項目では、「衣類費」が48.6%と最も多く、次いで「食費」（46.7%）、「レジャー・旅行費」（37.2%）の結果となりました。

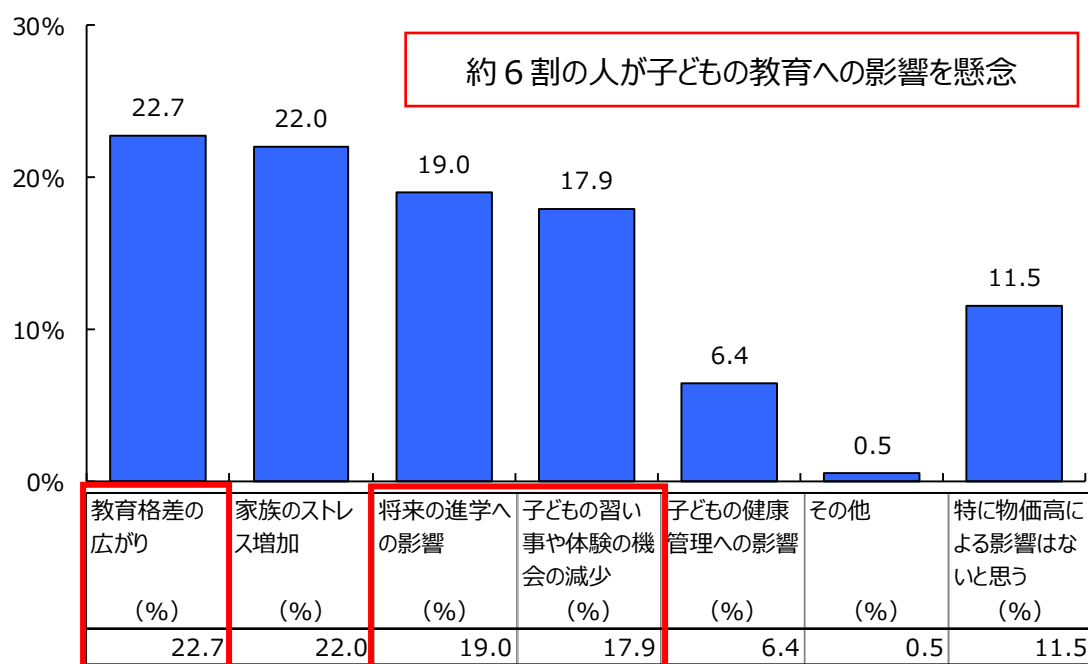
■子育てにかかる費用（月額）



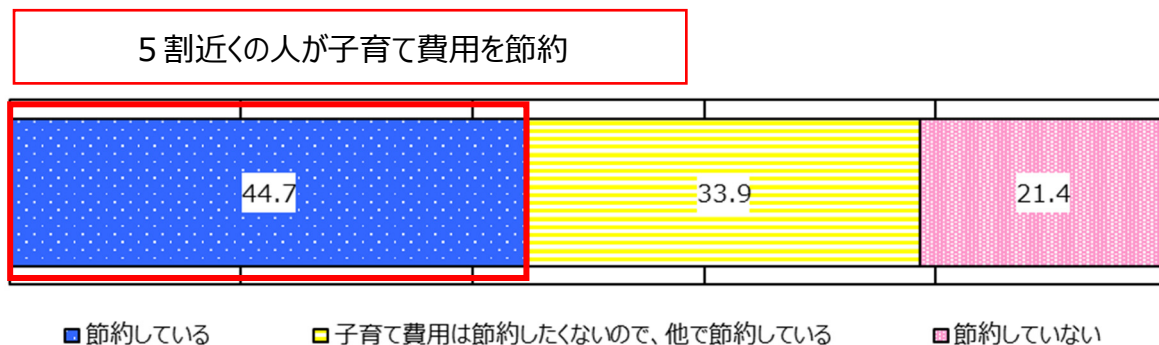
■負担を感じている子育て費用



■物価高が子どもに与える影響について

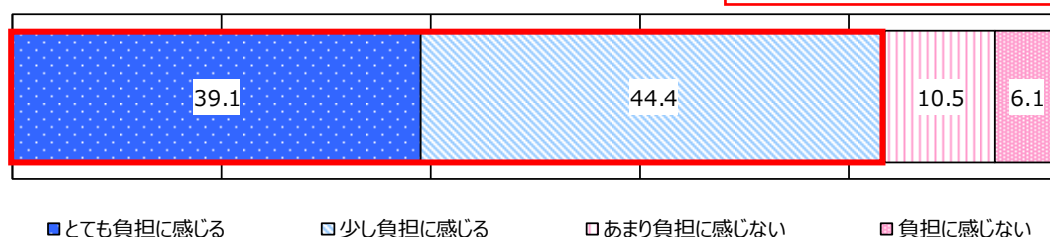


■子育て費用の節約状況

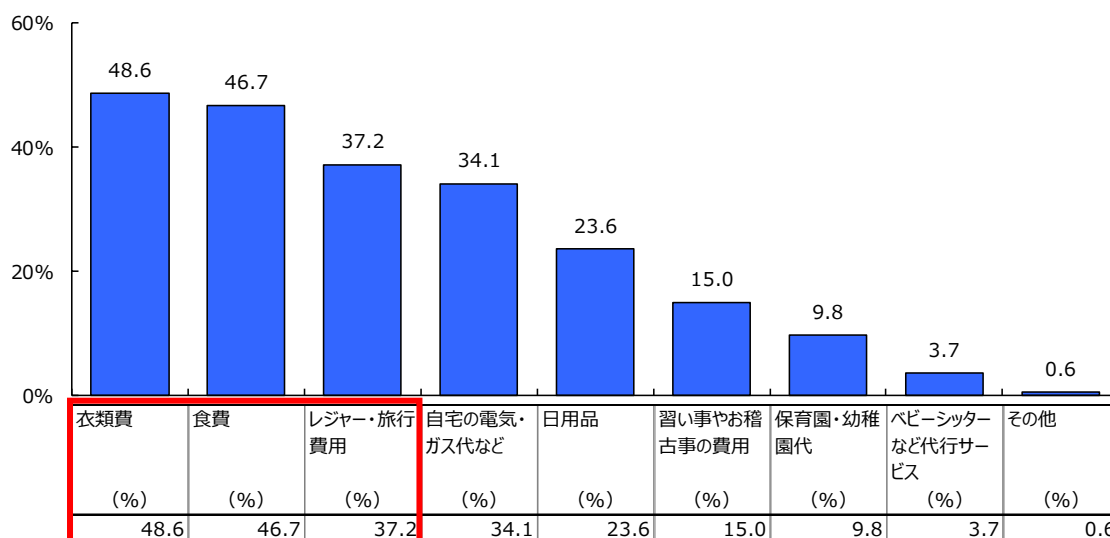


■昨年よりも物価高による負担を感じているか

83.5%が負担と回答



■節約している子育て費用



～フェロー チーフエコノミスト 小玉 祐一はこう見る！～

■明治安田総合研究所 フェロー チーフエコノミスト 小玉 祐一



子育てにかかる費用は昨年度から小幅アップとなりました。2019年10月から始まった幼保無償化で、子育て費用は大きく軽減されたはずでしたが、2022年以降の物価高が、その効果の多くを打ち消してしまいました。アンケートでは、物価高による子育て費用が、昨年と比べ「負担を感じる」とした人が全体の83.5%に達しています。

「子育て負担が大きいと感じている費用」については食費が45.0%でトップになっています。ただ、2023年度に前年比で+7.4%に達した食料価格の上昇率は、直近の8月には同+3.6%と、ようやく落ち着きつつあります。一方で、今年の春闘では約30年ぶりの高めの賃上げ率の実現し、足元では個別企業の給与への反映が進んでいます。来年度はアンケートの結果が好転していることを祈りたいところですが、一方で、習い事やお稽古事にかかる費用も年々上昇していることを踏まえると、子育て費用の負担感が和らいだと感じる家計はなかなか増えないかもしれません。

3. 子どもを望む気持ちについて

理想の子どもの人数は「2.51人」 6割が理想に届かず

○子育て世帯に（子どもが1人以上いる男女）に、理想の子どもの人数を聞くと、「2.51人」の結果となりました。また、理想の子どもの人数よりも、実際の子どもの人数が少ない人は62.6%で、約6割の人が理想に届いていない結果です。

○さらに、理想の子どもの人数に届いていない人のうち、今後の子どもを望む気持ちについて、消極的な人は67.5%（「子どもを欲しいが難しい」（53.3%）「欲しいと思わない」（14.2%）の回答者の合計）を占めており、最も大きな理由は「将来の収入面に不安があるから」（34.6%）でした。

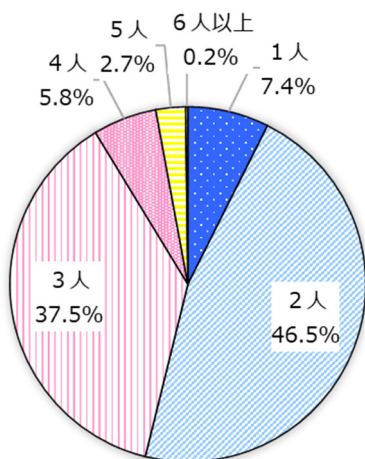
○その他の理由では、「年齢的に不安があるから」（18.1%）「教育費がかかるから」（12.9%）という回答も多くみられました。

○なお、「年齢的な不安」を理由にあげた人の平均年齢をみると43.6歳でした。厚生労働省の「人口動態統計」によると、晩婚化に伴い出産年齢も上昇傾向にあり、この晩婚化が出産に対する意識に影響を与えている可能性もありそうです。

○一方で、今後さらに子どもを欲しいと思う人（「さらに欲しい」の回答者）は21.4%でした。さらに子どもを欲しいと思った理由を聞くと、「自身・配偶者の収入アップ」（57.0%）が最も多く、次いで「子育て世帯の税制優遇」（35.3%）「幼保無償化」（32.3%）の順でした。

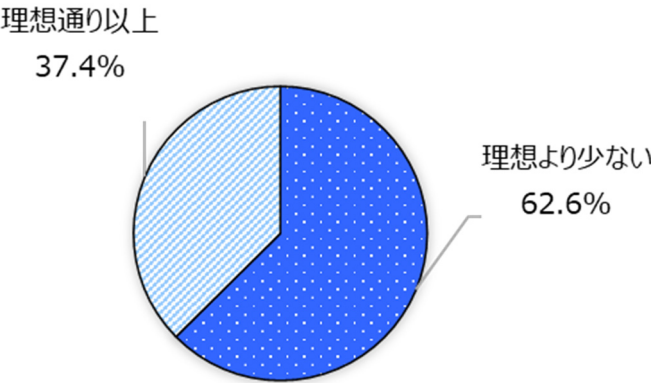
○出生率が1.20人である一方、子育て世帯の理想の子どもの人数は「2.51人」と、実際の出生率より理想が上回っていますが、今後の出産に関しては消極的な人が多いのが現状です。出生率を向上させるには、子どもを望むことに前向きな気持ちを抱かせる要因、具体的には、生活基盤となる収入増加や、幼保無償化など中長期的な子育て費用への不安解消が重要です。少子化問題の解決には、さらなる賃上げや、税制改革などの政策が必要なのかもしれません。

■理想の子どもの人数

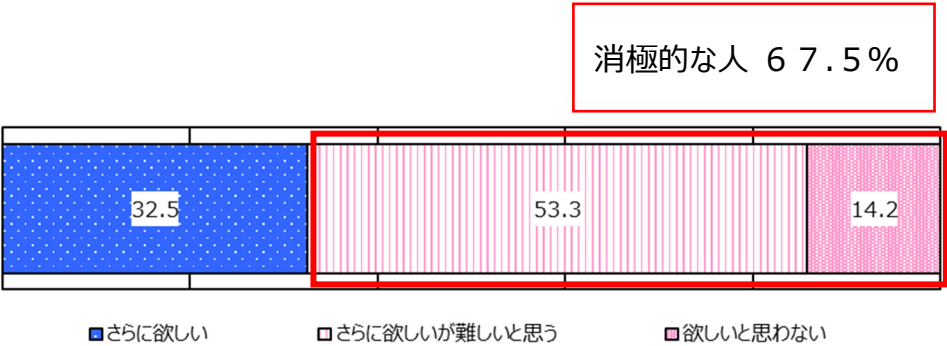


1人	2人	3人	4人	5人	6人以上	平均(人)
(%)	(%)	(%)	(%)	(%)	(%)	
7.4	46.5	37.5	5.8	2.7	0.2	2.51

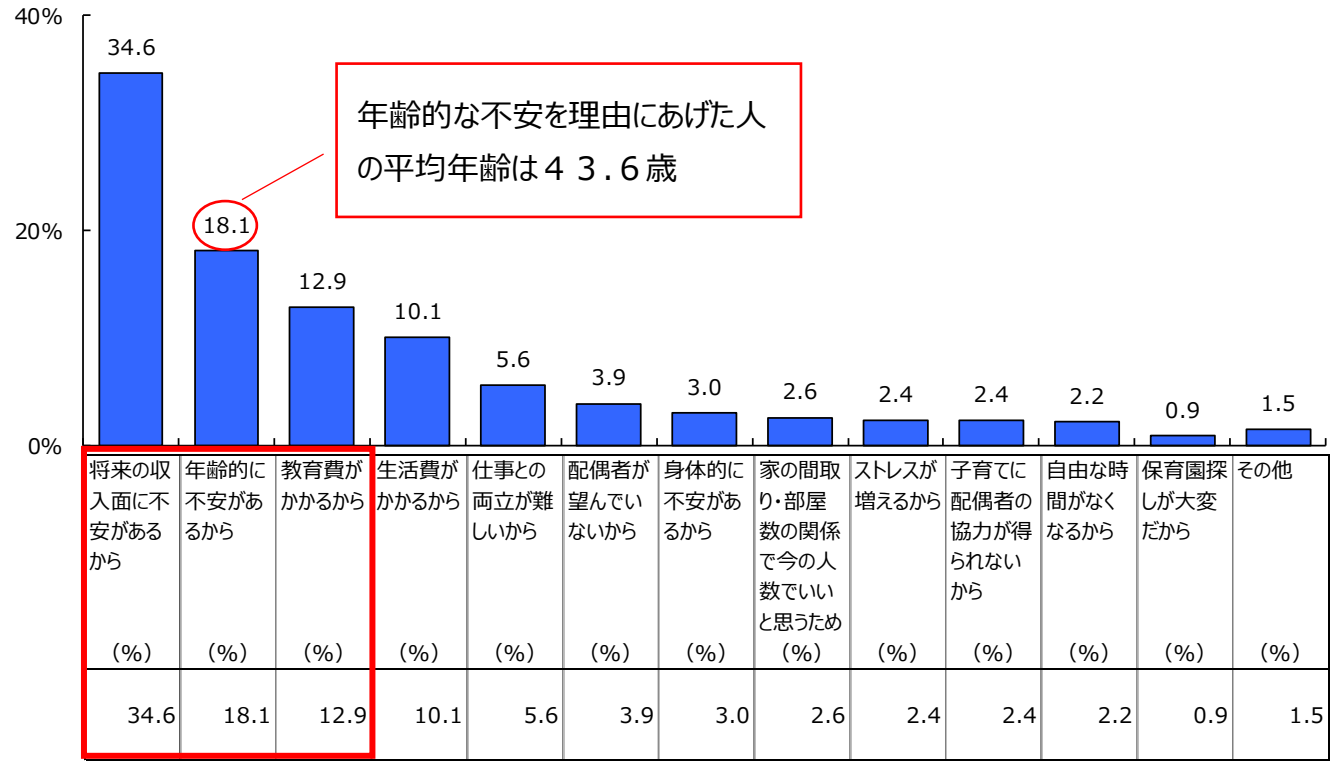
■理想の子どもの人数の実現度



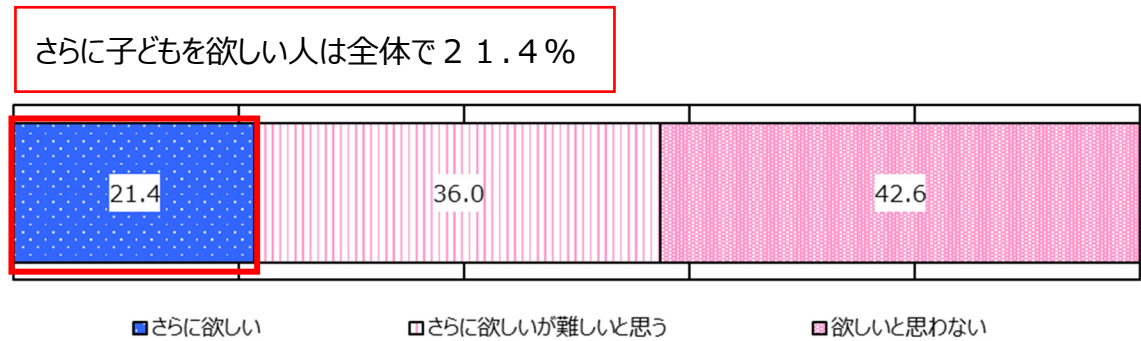
■今後さらに子どもを欲しいと思うか（※理想の子どもの人数に届いていない人の回答）



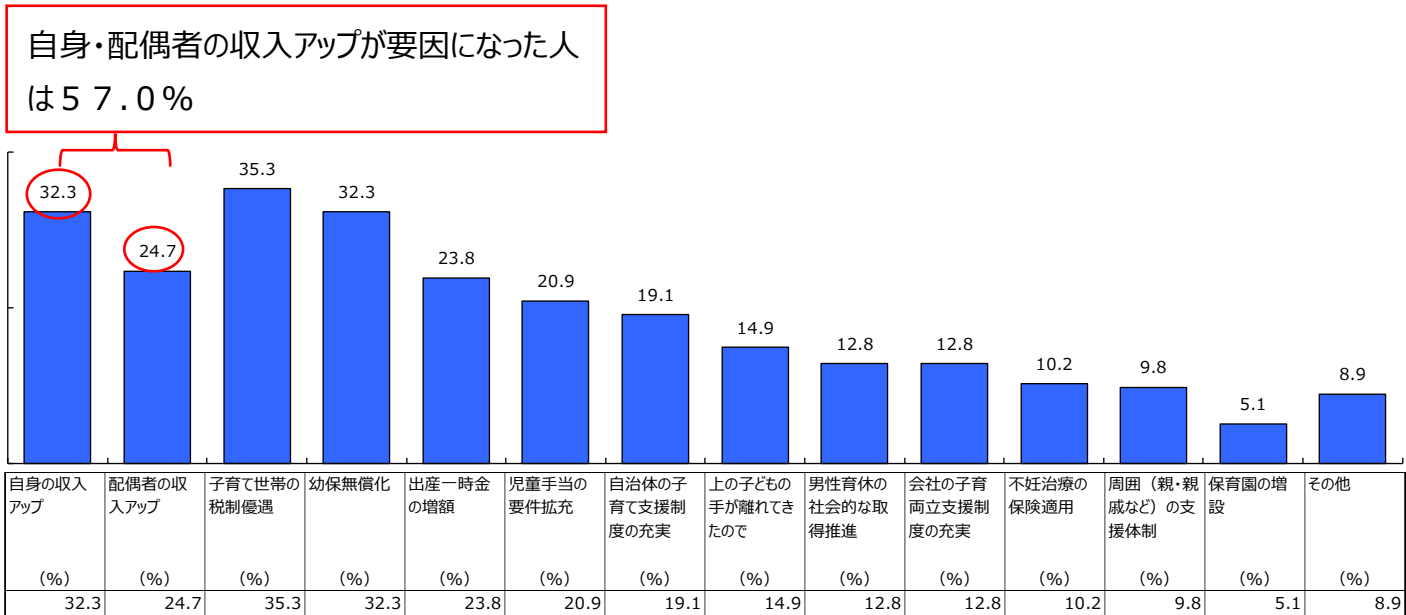
■消極的な理由（※上記、消極的な人の回答）



■ 今後さらに子どもを欲しいと思うか



■ さらに子どもを欲しいと思った理由（※上記、さらに子どもを欲しい人の回答）



エコノミスト 木村 彩月はこちら見る！

■明治安田総合研究所 経済調査部 エコノミスト 木村 彩月



子どもを「さらに欲しい」と回答した割合は、幼保無償化などの効果もあって2020年に大きく上昇しましたが、物価高によりその効果は打ち消され、昨年同様、今年も低位にとどまりました。子どもをさらに希望しない理由を昨年と比較すると、昨年は3位だった「生活費がかかるから」が、今年は2位に上昇しています。

「将来の収入面に不安があるから」がトップを維持していることも踏まえれば、経済的不安が子どもを欲しい気持ちに与えるマイナスの影響はより強まっているようです。

物価上昇率は2023年初のピーク時に比べれば低下していますが、日銀の「生活意識に関するアンケート調査（2024年9月）」を見ると、個人が予想する将来の物価上昇率は2022年に大きく跳ね上がった後、今年に入ってから高止まりが続いています。これまで物価高が長引いたこともあって、先々の物価上昇に対する懸念は根強く、経済的な理由で子どもを諦めようとする人が増えているように思います。

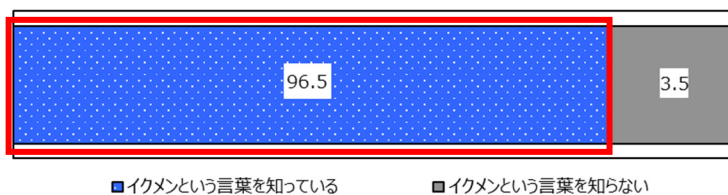
「さらに子供が欲しい」と考える気持ちに影響があった項目としては、「自身・配偶者の収入アップ」「子育て世帯の税制優遇」が上位にきています。子どもを持つということは、数十年にもわたって教育費をはじめとする経済的負担が増えることを意味します。昨年と今年の春闘では高い賃上げ率の実現しましたが、子育て世帯での収入に対する不安払拭にはまだ充分ではないとみられます。一過性ではなく、今後も賃上げが続くとの期待が広まることが重要です。まずは、来年の賃上げ率が昨年や今年同様に高い伸びとなり、賃上げの継続性が示されるかどうかのポイントとなるでしょう。

4. イクメンの浸透について

「イクメン」認知度 9 割も使用率 1 割未満 男性の育児は「当たり前」に変貌

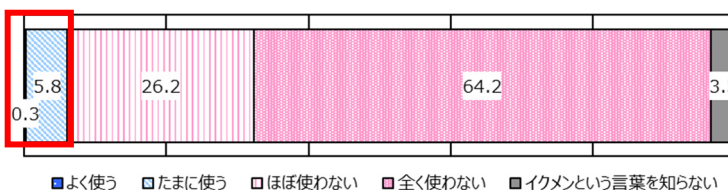
- 10月19日は（10とうさん19いくじの日）で「イクメンの日」に制定されています。
- 最近ではあまり耳にしない「イクメン」という言葉の使用について聞いたところ、言葉の認知度は9割以上でしたが、使用率は1割未満（全く使わない64.2%、ほぼ使わない26.2%の計90.4%）と、ほとんど使われていない状況がわかりました。
- なぜ「イクメン」という言葉を使用しないのか理由を聞くと、「男性の育児は当たり前で言葉に違和感がある」（41.9%）や「育児をしている男性を特別視したくない」（27.7%）といった、男性の育児は当たり前だから使用するまでもないと思う人が約7割で、多くの人が男性の育児を当たり前であると感じていることがわかります。
- 2010年に厚生労働省で、男性の育休を推進する「イクメンプロジェクト」が発足し、当時流行語大賞にも選ばれた「イクメン」という言葉は、世の中にすっかり浸透しており、「男性の育児は当たり前」という意識改革へつながる功績を残したといえるのではないのでしょうか。

■「イクメン」という言葉の認知度

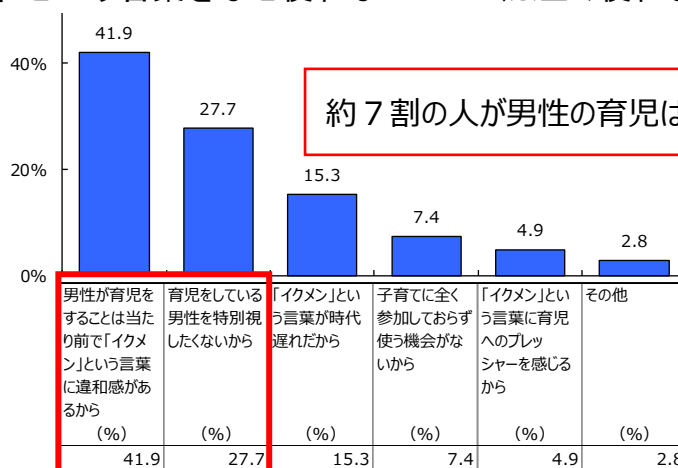


イクメンという言葉の認知度は約9割だが
使用率は1割未満

■「イクメン」という言葉の使用率



■「イクメン」という言葉をなぜ使わないのか（※全く使わない、ほぼ使わないと回答した人）



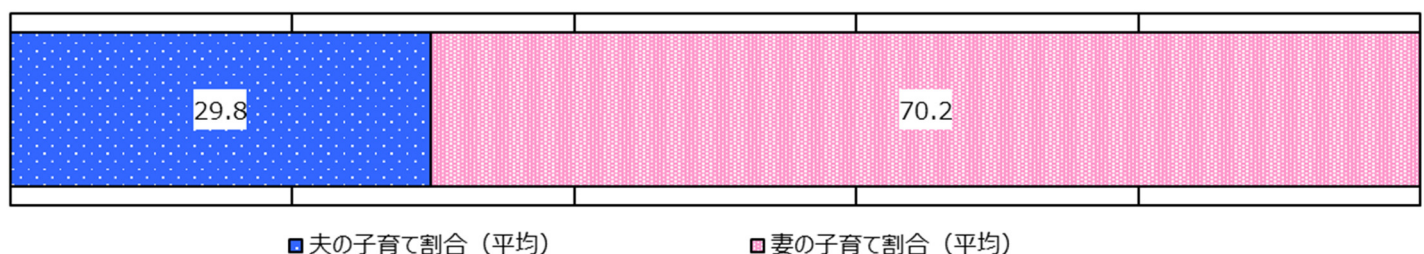
約7割の人が男性の育児は当たり前という意識

5. 男性の子育てへの意識と子育て分担割合

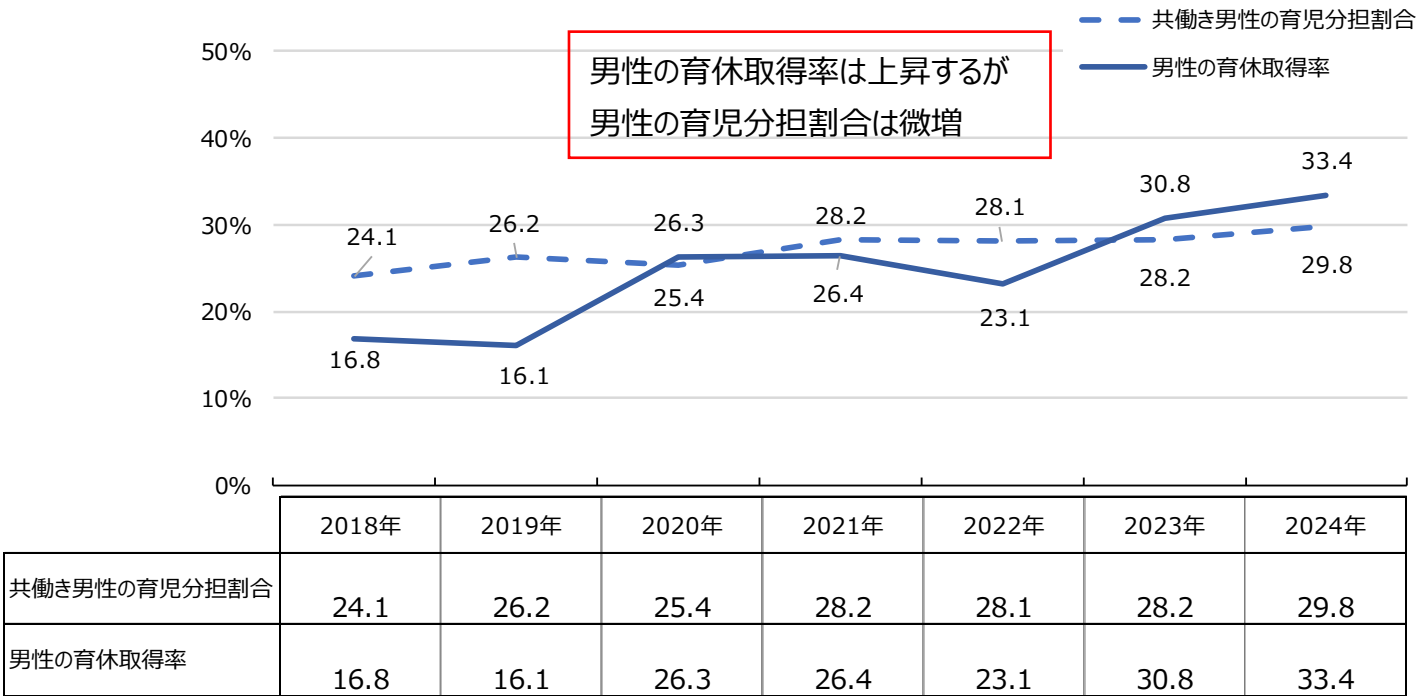
男性の育児は当たり前だが、育児の実態は収入差や職場環境で女性に偏る

- 「イクメン」という言葉の浸透から、男性の育児への意識は変わったようですが、実際の男性の子育ての状況に変化があるのか、共働きの男女の育児分担割合について回答を見てみると、男性は29.8%：女性は70.2%でした。これを2018年の調査開始時と比較すると、男性24.1%：女性75.9%で、微増の状況です。
- 男女平等や女性活躍の観点から、女性の過度な育児負担を軽減し男女ともに仕事と育児の両立を図るため、男性の育休取得促進が進められました。その結果、男性の育休取得率は2018年の16.8%から今年は33.4%と、ほぼ倍増しました。しかし、育児分担割合の比重は未だ女性に偏っています。
- なぜ、育児分担割合は女性に偏ったままなのか、自身よりも妻の方が育児の分担割合が高い男性にその理由を聞くと、「自身の方が妻よりも収入が高く仕事をセーブできない」（39.1%）次いで、「育児を理由に自分の仕事をセーブしづらい雰囲気があるため」（22.8%）と、就業環境を理由とした回答が6割（61.9%）を超えました。
- 男性の育児への意識は変化しつつあるようですが、女性の育児に対する負担は依然として高いままで、その原因の一つとして、日本の社会課題である男女の賃金差や男性が仕事をセーブしづらい職場環境が影響しているようです。
- 男女平等な育児の実現に向けては、意識だけでなく、企業の取り組みによって賃金差を縮小し、男女ともに柔軟に働ける職場環境を整えることが重要かもしれません。

■共働き世帯の子育て分担割合

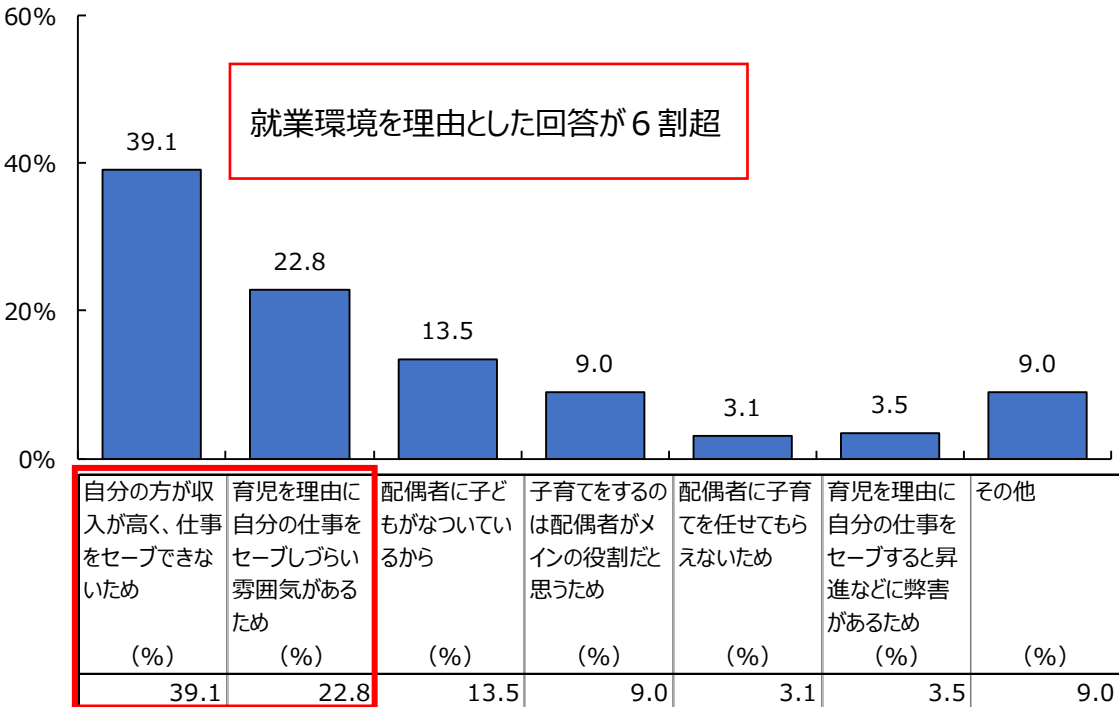


■共働き世帯の男性の子育て分担割合と男性の育休取得率の推移



■妻の方が子育て分担割合が高い理由

(※共働き世帯の男性で妻の方が子育て分担割合が高い人の回答)



6. 子育てをしたい都道府県

トップは東京都！理由は「教育環境が充実しているから」

○子育て世帯に、子育てをしたい都道府県を聞いたところ、東京都が15.7%でトップに選ばれました。

○選んだ理由は「教育環境が充実しているから」や、「子育て支援制度が充実している」を選んだ人が多数で、“子育てをするインフラや制度”について魅力を感じているようです。

○続いて2位は神奈川県（7.9%）、3位は大阪府（7.8%）で、最も多い理由は両方とも「親や親族が近くにいるから」でした。

○なお、現在の居住地と同じ都道府県を選んだ人は7割以上（74.5%）で、慣れ親しんだ環境で子育てをする方が良いと思う人が多いのかもしれません。

○ちなみに、現在の居住地以外で選んだ人の子育てをしたい都道府県をみると、こちらのトップも東京都（20.3%）で、理由も同じく「教育環境が充実しているから」でした。

○2位以降は順位が変わり、2位は福岡県で「教育環境が充実しているから」という理由、3位は北海道（8.2%）で、「自然環境が豊か」という理由でした。

○慣れ親しんだ土地以外での子育てでは、“教育環境の充実”や“自然環境”に魅力を感じる人が多いようです。

【子育てをしたい都道府県】

順位	都道府県	最も多い理由
1位	東京都 (15.7%)	教育環境が充実しているから
2位	神奈川県 (7.9%)	親や親族が近くにいるから
3位	大阪府 (7.8%)	親や親族が近くにいるから
4位	千葉県 (5.7%)	自然環境が豊か
4位	愛知県 (5.7%)	親や親族が近くにいるから
4位	福岡県 (5.7%)	親や親族が近くにいるから

【居住地以外で子育てをしたい都道府県】

順位	都道府県	最も多い理由
1位	東京都 (20.3%)	教育環境が充実しているから
2位	福岡県 (9.3%)	教育環境が充実しているから
3位	北海道 (8.2%)	自然環境が豊か
4位	沖縄県 (7.5%)	自然環境が豊か
5位	兵庫県 (6.0%)	教育環境が充実しているから

7. 0～6歳の子どもがいる理想のパパ・ママ有名人 ランキング

理想のパパは杉浦太陽さん 理想のママは北川景子さん

- 子育て世帯に、同年代の子どもがいる（0～6歳の子ども）有名人で理想のパパとママを聞くと、理想のパパのトップは杉浦太陽さんでした。選んだ理由をみると、「子育てに協力的なイメージがある」や、「家族の仲が良いイメージがある」といった回答が多くみられました。
- 2位はDAIGOさんで、「やさしくて人柄がよさそう」や「奥さんのことを大事にしている」という理由、3位は「おしゃれでかっこいいから」「子育てを楽しんでいそう」といった理由で賀来賢人さんが選ばれました。
- 理想のママのトップは北川景子さんでした。選んだ理由は「いつも綺麗でかっこいい」や「子育てと仕事をしっかり両立していそう」といった回答が多くみられました。
- 2位は辻希美さんで、「育児を楽しくがんばっているから」や「夫婦で協力しあってそう」という理由。3位は「子ども好きで可愛がっているイメージ」「出産しても可愛いから」といった理由で上戸彩さんが選ばれました。

【理想のパパトップ5】※敬称略

順位	理想のパパ	代表的な理由
1位	杉浦太陽（25.9%）	子育てに協力的なイメージ、家族の仲が良い
2位	DAIGO（11.4%）	やさしくて人柄が良い、奥さんのことを大事にしている
3位	賀来賢人（6.6%）	おしゃれでかっこいいから、子育てを楽しんでいそう
4位	小林よしひさ（4.8%）	やさしそう、子どもと遊ぶのが上手そう
5位	長友佑都（3.7%）	子だくさん、家族を大事にしている

【理想のママトップ5】※敬称略

順位	理想のママ	代表的な理由
1位	北川景子（20.6%）	いつも綺麗でかっこいい、子育てと仕事を両立していそう
2位	辻希美（17.4%）	育児を楽しくがんばっている、夫婦で協力しあってそう
3位	上戸彩（8.5%）	子ども好きで可愛がっている、出産しても可愛いから
4位	平愛梨（6.8%）	夫婦仲がよさそう、子育てを楽しんでいそう
5位	榮倉奈々（3.9%）	家庭を大事にしながら仕事をきちんとしている